

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22320131

研究課題名(和文) 東アジアにおける前期冷戦文化の多角的考察

研究課題名(英文) Multi-faceted Analyses of the Early Cold War Culture in East Asia

研究代表者

成田 龍一(Narita, Ryuichi)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：60189214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：「戦後」といわれる時期は、世界史的な視野では冷戦体制となる。この認識のもとで、これまで「戦後文化」として、一国史的に考察されてきた思想史、文化史を「冷戦文化」として、あらためて把握しなおした。東アジアのなかで、「日本」の思想史を点検し再文脈化をおこなったが、「戦争経験」が大きな軸となった。アジア・太平洋戦争の「戦争経験」が、朝鮮戦争とベトナム戦争の影響のもとで、いかなる総括がなされたか、の解明を試み、とくに、沖縄での営みの考察には、力を入れた。また、冷戦文化は、映画や大衆小説として展開されることが多く、その点から映画の分析をおこなった。この過程を通じて、冷戦文化という概念を鍛えていった。

研究成果の概要(英文)：The "postwar" era regards the Cold War regime in general in world history perspective. Under this recognition, "postwar culture" which has been national history manner consideration, our project examined re-grasping the "Cold War culture". The project has been subjected to re-contextualize and inspect the intellectual history of "Japan" in the East Asia, yet the project found "war experience" was a major axis for Japanese intellectual history. The project studied how "the Asia-Pacific War experience" has been reviewed in the postwar era under the influence of the Korean War and the Vietnam War. Also the project especially concentrated on the elucidation of any summary has been made on Okinawa. The Cold War culture was often lay out to movies and popular fiction so that the project also examined Cold War Culture era movies. Our project forged the concept of the Cold War culture through these processes.

研究分野：日本史

キーワード：日本史 近現代史 戦後史 文化史 思想史

1. 研究開始当初の背景
本研究の当初の背景には、四つの認識があった。①1990年前後の冷戦体制崩壊により、「戦後」と認識されてきた日本における時間と空間が、冷戦体制にはかならない、と認識されるに至っていたこと。そのため、②戦後日本を、東アジアの冷戦体制のなかで把握する必要性があったこと。また、二国間の関係に封じ込めた東アジアの考察ではなく、東アジアにおける冷戦体制として認識することが課題となっていた。

さらに、③アメリカ、韓国で「冷戦文化研究」(Cold-War Culture Studies)が急速に進んでおり、日本の事例も求められていたことがあった。そして、④もっぱら国際関係や国際政治の領域で論じられてきた冷戦体制を、あらためて文化史の観点から考察することを図った。そのために「冷戦文化」という概念を、日本の歴史学界に提供することを試みようとした。

2. 研究の目的
本研究の目的は、これまで、もっぱら「戦後文化」として考察されてきた1945-1990年の文化研究を、あらたに「冷戦文化」として枠付け、この観点からの文化の多角的な研究を図ることにある。文学作品にせよ、映画にせよ、従来は「戦後」の枠組みで把握され考察されてきた。当該作品に、「戦後」の意識や思想がいかん投影されているか、という問題意識と方法である。しかし、本研究では、文学作品や映画のなかに、意識的・無意識的に埋め込まれている冷戦体制の認識—冷戦的思考を見出し、それを分析することに求めた。

この営みによって、この時期の文化を「日本」に閉じたものにするのではなく、東アジアの冷戦体制のなかでの動きとして把握することが可能となる、また、アメリカの影響を有機的に組みこむことが可能となる、という問題意識のもとに、本研究を遂行した。

3. 研究の方法
本研究は、定期的な研究会（「冷戦文化研究会」）と、国際会議を含む研究集会とを組み合わせ、研究の充実を図るとともに、研究成果を広く国内・国外の研究者と共有し、議論を深める活動を図った。そのために、①日本国内はもとより、東アジア、さらにアメリカにおける冷戦体制—冷戦文化の研究文献を互いに読みあつた。この営みは、日本を対象とする研究者と、東アジア

の地域研究をおこなう研究者との共同作業でもあった。②「冷戦文化」といったときには、文学作品および映画が主要なものとなるが、純文学やA級作品の映画以上に、大衆小説やB級映画が冷戦的思考を投影している。探偵小説やスパイ映画、アクション映画などはその典型である。そのために、こうした作品の資料収集に積極的にあたることを試みた。映画は、DVDで収集することを図った。

4. 研究成果

冷戦文化研究会や国内外の国際会議を通じ議論されたのは、従来の「戦後思想史」や「戦後文学史」が冷戦体制の影響下にあることが、看過されがちだったということである。「戦後」という認識枠組みが一国史的な視点を作りだし、そのもとで議論がなされていたことが、「冷戦文化」という視覚によってあきらかにされた。また、韓国や台湾でも、同様に、そこで経験がそれぞれ個別の経験として、押しとどめられていたこともあきらかにされた。東アジアに共通の経験がなされていたのだが、そのことが認識されない状況が形づくられていたということである。本科研により、このことが解明されるとともに、多くの事例も発掘された。このことは、アメリカのもつ影響力の大きさの確認でもあった。「意識のなかのアメリカ」ということが、日本のみならず、韓国や台湾でも重要であることが、研究会、国際会議によってあきらかにされた。

冷戦文化研究会を各年度3回、総計15回開催したほか、アメリカにも毎年赴き、コロンビア大学、ニューヨーク大学、ハーバード大学、デューク大学、ノースカロライナ大学などの諸大学と共同で会議を開催した。また、アメリカの歴史学会（近代日本研究会 MJHW）でもパネルを組織した。さらに、ドイツ・ライプツィヒ大学で「マルクス主義と近代日本」へも参加した（2013年）。

他方、冷戦体制の地政学上、重要な位置を占める沖縄に関し、比屋根照夫・琉球大学名誉教授による「沖縄近現代史講義」を2013年度・14年度に6回開催した。

国内でも、国際会議を開催した。「戦後日本というアムネジア」(早稲田大学、2012年)、「文化と記憶のポリティクス」(2014年、東京外国語大学)を開催し、アメリカ、カナダ、ドイツから報告者を招聘した。前者では、加藤哲郎・一橋大学名誉教授、和田春樹・東京大学名誉教授に基調講演を依頼し、

後者では、川口隆行・広島大学教授、我部聖・沖縄大学准教授らに報告を依頼した。また、酒井直樹・コーネル大学教授、平野克弥・カリフォルニア大学教授も報告をおこなった。

いずれの報告と討論が充実したのも、本科研に基づく研究活動に拠っていると理解している。とくに、定期的開催した冷戦文化研究会の意義があらためて確認された。

そのほか、各自が出版活動をおこない、随時、成果を公表した。このことによって、「冷戦文化」の概念が固められた。本研究は、主として1950年代に力点を置き、冷戦文化の前期を扱ってきたが、1960-70年代の後期冷戦文化研究への展望がみられる研究となった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 32 件)

- ① 成田龍一、「評伝」の世界と「自伝」の領分、歴史評論、査読無、777、2015、33-46
- ② 鳥羽耕史監修・文、地図で見る サークル文化の勃興、週刊 新発見！日本の歴史、査読無、45、2014、16-17
- ③ 丸川哲史、ひまわり運動の歴史的経済的制約への一視座、インスクリプト 社会運動、査読無、415、2014、26-32
- ④ 坪井秀人、モダニズムの中の〈和歌歌曲〉-山田耕筰、ストラヴィンスキーそのほか、JunCture 超越的日本文化研究、査読無、5、2014、130-153
- ⑤ Naoki WATANABE (渡辺直紀), The colonial and Transnational Production of Suicide Squad at the Watchtower and Love and the Vow, Cross-Currents, 査読有、2(1)、2014、89-115
- ⑥ 坪井秀人、〈遠さ〉あるいはアウラの向う側へ-前期『月の吠える』の詩の風景、比較文学研究、査読無、98、2013、17-34
- ⑦ 坪井秀人・樽沼範久・岡村恵子、日記、プライベート／パブリックの境界にある「ゆらぎ」へ Diaries: Towards the “Bulurring” of the Border Between and Private、恵比寿映像祭パブリックメディアアリー、査読無、第5回、2013、12-29
- ⑧ 坪井秀人、レビュー 無償であることの幸福-一生誕 120 年記念 田中恭吉展、JunCture (超越的日本文化研究)、査読無、4、2013、174-176
- ⑨ 坪井秀人、ナルシスの自己証明-短歌時代の萩原朔太郎、開館 20 周年記念・前橋文学館特別企画展 詩壇登場 100 年 萩原朔太郎、愛隣詩篇の時代-彷徨、浪漫、哀傷、査読無、巻号数無、2013、頁数記載無
- ⑩ 戸邊秀明、日本「戦後歴史学」の展開と未完の梶村史学：国家と民衆はいかに〈再〉発見されたか、社会科学、査読無、42(4)、2013、27-47
- ⑪ 丸川哲史、李小龍と中国、現代思想、査読無、41(13)、2013、92-102
- ⑫ 鳥羽耕史、メディア実験と他者の声-安部公房「チャンピオン」と「時の崖」、国文学研究、査読有、166、2012、12-23
- ⑬ 戸邊秀明、越境者たちの復帰運動：1950年代前半における在日日本人沖縄人学生の組織と意識、沖縄文化研究、査読無、38、2012、435-508
- ⑭ 戸邊秀明、社会運動史としての戦後歴史学研究のために：史学史の再検討にむけたいくつかの提言、日本史研究、査読無、600、2012、194-218
- ⑮ 戸邊秀明、「高度成長の時代」にむきあう方法意識のために：大門正克他編『高度成長の時代』第三巻、年報日本現代史、査読無、17、2012、243-252
- ⑯ 丸川哲史、中華映画比較論序説、at プラス、査読無、13、2012、102-109
- ⑰ 丸川哲史、中国／反日デモの世界性と固有性、at プラス、査読無、14、2012、103-115
- ⑱ 丸川哲史、島と海と東アジアの百二十年、現代思想、査読無、40(17)、2012、90-103
- ⑲ 丸川哲史、現代中国の空間編成-毛沢東の遺産、at プラス、査読無、11、2012、86-99
- ⑳ Naoki WATANABE (渡辺直紀), The colonial and Transnational Production of Suicide Squad at the Watchtower and Love and the Vow, Cross-Currents, 査読有、E-Journal 5、2012、88-113、DOI: <http://cross-currents.berkeley.edu/e-journal/issue-5>
- ㉑ 成田龍一、違和感をかざす歴史学、思想、査読無、1048号、2011、72-98

- ②② 坪井秀人、サークル運動評価の困難さ、社会文学、査読無、33号、2011、166-169
- ②③ 坪井秀人、作者の決闘-「女の決闘」における翻訳／翻案、太宰治研究、査読無、19号、2011、37-51
- ②④ 坪井秀人、歌謡とジャポニスム、學士会会報、査読無、889号、2011、50-54
- ②⑤ 鳥羽耕史、安部公房から筒井康隆へーパロフ的言語とフロイト的言語、国文学解釈と鑑賞、査読無、76(9)、2011、98-103
- ②⑥ 鳥羽耕史、『人民文学』論-「党派的な「文学雑誌」の意義、社会文学、査読有、33、2011、28-44
- ②⑦ 戸邊秀明、沖縄「戦後」史における脱植民地化の課題：復帰運動が問う〈主権〉、歴史学研究、査読無、885、2011、115-124
- ②⑧ 丸川哲史、中国の「民主」とは何か？「保衛釣魚台」運動、劉曉波問題、その他、インパクション、査読無、179、2011、56-67
- ②⑨ 丸川哲史、戦後台湾における戦争文学の形成（一九五〇年代～七〇年代）、社会文学、査読無、33、2011、159-162
- ③⑩ 成田龍一、三つの「鳥島」、思想、査読有、1036号、2010、188-206
- ③⑪ 成田龍一、民衆史と社会史と文化史と、民衆史研究、査読無、80号、2010、51-68
- ③⑫ 坪井秀人、寝取られ男のモダニズム-李箱再読、日本學（韓国東国大学校）、査読有、30号、2010、83-106

[学会発表] (計 24 件)

- ① Naoki WATANABE(渡辺直紀), Korean Writer's Japanophone Literature in Colonial Period, The Heartless, Dual-language Work, Modern Korean Literature(Post-AAS Literature Workshop), 2015年3月29日, The University of Chicago, Center for East Asian Studies (IL, USA)
- ② Naoki WATANABE(渡辺直紀), The Politics of Gender and Ethnicity in Li Xianglan's Film, Empire & Language: Translingual Inter-Asia, 2015年3月12日, Duke Shanghai University (Shanghai, China)
- ③ 渡辺直紀、李香蘭における映画と政治、日韓国交樹立50年：ひと・教育・文化

(高麗大学校日本研究センター国際学術シンポジウム)、2015年1月10日、高麗大学校100周年記念館(ソウル、韓国)

- ④ 渡辺直紀、韓国文学評論の翻訳の舞台裏、韓国文学翻訳院翻訳セミナー、2014年12月13日、新潟県立大学(新潟県新潟市)
- ⑤ 渡辺直紀、日本における林和研究、林和文学研究会・第7回林和文学シンポジウム、2014/10/17、昌原大学校総合教育館(韓国・慶尚南道・昌原市)
- ⑥ Koji Toba (鳥羽耕史), How the "Truth" Is Sponsored: Koyama Itoko and the Controversy over Dam Site, Bundan Snark: Writing and Fighting in Modern Japan, 2014年5月10日, Executive Boardroom at University Campus Center (UCC) 2390, University of Iowa (アイオワシティ、アメリカ)
- ⑦ 成田龍一、戦争と文学を読む、日本社会文学会、2014年3月8日、大妻女子大学(東京都)
- ⑧ 成田龍一、戦後日本史のこわさと面白さ、近現代史教育研究会例会、2013年12月14日、青山学院高等部(東京都)
- ⑨ 成田龍一、近代史をどう教えるか、全国歴史教育研究会大会、2013年8月1日、横浜教育センター(神奈川県)
- ⑩ 成田龍一、被爆経験の「伝承」をめぐって、広島平和文化センター、2013年7月27日、広島平和国際会議場(広島県)
- ⑪ 成田龍一、歴史教育論と歴史学の対話のために-歴史教科書を媒介として、埼玉県高等学校社会科研究会大会、2013年7月3日、埼玉県立浦和第一女子高等学校(埼玉県)
- ⑫ 鳥羽耕史、東アジア連環画の連環-中国から日本、韓国へ、シンポジウム 文化の衝突と融合-東アジアの視点から、2013年2月2日、早稲田大学戸山キャンパス33-2号館第1会議室(東京都)
- ⑬ 坪井秀人、戦争の記憶／記憶の戦争-アジア太平洋戦争と詩の問題、東国大学校招聘講演会、2013年1月13日、東国大学校(ソウル・韓国)
- ⑭ 戸邊秀明、現代沖縄民衆の歴史意識と主体性、歴史科学協議会第46回大会、2012年11月17日、早稲田大学(東京都)

- ⑮ Naoki WATANABE(渡辺直紀), Takashi FUJITANI & Nayoung Aimee Kwon, “The Colonial and Transnational Production of Suicide Squad at the Watchtower and Love and the Vow, Workshop for Special issue of Cross-Currents Antinomies in the Colonial Film Archive Reconsidering Transcolonial Co-productions in the Japanese Empire, 2012年10月6日, Institute of East Asian Studies, University of California, Berkeley, America
- ⑯ Hideto TSUBOI (坪井秀人), Kriegserinnerung und die 1960er Jahre in der Literatur: Inoue Mitsuharu und Takahashi Kazumi, Re-Writing Modern and Contemporary Japanese Intellectual History, The Fourth International Symposium, 2010年12月18日、ライプツィヒ大学東アジア研究所 (ライプツィヒ・ドイツ)
- ⑰ 坪井秀人, 言葉の境界をこえる—日本近代詩史再考、上海交通大学講演会、2011年12月9日、上海交通大学 (上海・中国)
- ⑱ 坪井秀人, 食べる身体／食べられない身体—摂食障害とマンガ・文学、国際シンポジウム「文化における身体」、2011年11月19日、輔仁大学 (台北、台湾)
- ⑲ Hideto TSUBOI(坪井秀人), Sexualität redet oder Girl redet, ウィーン大学日本学講演会、2011年6月15日、ウィーン大学 (ウィーン・オーストリア)
- ⑳ Hideto TSUBOI(坪井秀人), The Invention of Minyo: The Development of the Concept and Genre through Translation, ウィーン大学日本学校講演会、2011年5月26日、ウィーン大学 (ウィーン・オーストリア)
- ㉑ Hideto TSUBOI(坪井秀人), Eating as “das Unheimliche” – On the representations of the eating disorder in modern Japanese culture, チューリヒ大学講演会、2011年5月24日、チューリヒ大学 (チューリヒ・スイス)
- ㉒ 戸邊秀明, 沖縄「戦後」史における脱植民地化の課題: 復帰運動が問う〈主権〉、歴史学研究会2011年度大会・現代史部会「脱植民地化の困難にむきあう: 20世紀における占領と解放」、2011年5月22日、青山学院大学 (東京都)
- ㉓ 戸邊秀明, 併合体験の思想史—沖縄から朝鮮半島との不可視の交錯をたどる、韓国日本史学会2010年度大会シンポジウム「韓国併合と日本帝国主義—帝国秩序に及ぼした植民地の衝撃」、2010年11月20日、祥明大学校 Sangmyung University (ソウル・韓国)
- ㉔ Hideto TSUBOI (坪井秀人), Formation of the Concept “Folk Song” (Minyo) in Modern Japan, “Lock’ N Roll Is Here To Stay” Stereotyping, Domesticating and Inventing Popular Musics in/of Asia, 2010年8月7日、ハイデルベルク大学カール・ヤスパース研究所 (ハイデルベルク・ドイツ)
- [図書] (計 22 件)
- ① 渡辺直紀, プリタニカ・ジャパン、ブリタニカ国際年鑑2015 (韓国文学)、2015 (発行確定)、300-301
- ② 大口勇次郎・成田龍一・服藤早苗編, 山川出版社、ジェンダー史、2014、346-398
- ③ 坪井秀人他, 平凡社、「帰郷」の物語／「移動」の物語 戦後日本におけるポストコロニアルの想像力、2014、333
- ④ 紅野謙介、高榮蘭、鄭根埴、韓基亨、李惠鈴編 (鳥羽耕史), 新曜社、検閲の帝国—文化の統制と再生産、2014、488
- ⑤ 丸川哲史, インスクリプト、魯迅出門、2014、272
- ⑥ 坪井秀人他, 集英社、コレクション戦争と文学 別巻 (典) 〈戦争と文学〉案内、2013、700
- ⑦ 坪井秀人他, 鼎書房、現代女性作家読本17 桐野夏生、2013、163
- ⑧ 丸川哲史, 平凡社、思想課題としての現代中国、2013、325
- ⑨ 成田龍一, 中央公論新社、近現代日本史と歴史学、2012、296
- ⑩ 成田龍一, 校倉書房、歴史学のナラティブ、2012、461
- ⑪ 坪井秀人, 名古屋大学出版会、性が語る20世紀日本文学の性と身体、2012、682
- ⑫ 坪井秀人他, 三弥井書店、日本近代文学と戦争「十五年戦争」期の文学を通じて、2012、265

- ⑬ 神戸大学大学院人文学研究科共生倫理研究会編、戸邊秀明、共生の多様性（「非日本人」送還問題と「沖縄人」という主体：〈戦後〉形成期における「共生」への問い）、2012、31-47
- ⑭ 渡辺直紀、集英社、コレクション戦争と文学Ⅰ 朝鮮戦争・月報13（韓国・朝鮮文学と戦争—朝鮮戦争を中心に）、2012、9-12
- ⑮ 渡辺直紀、新潮社、文藝年鑑2012（韓国文学—現況と翻訳・研究）、2012、111-113
- ⑯ 吉見俊哉他編、弘文堂、現代社会学事典、2012、1648
- ⑰ 鳥羽耕史、弘文堂、現代社会学事典（「ルポルタージュ」）、2012、a1640
- ⑱ 鈴木勝雄他編、鳥羽耕史、東京国立近代美術館、実験場1950s（「記録が準備した公共圏」）、2012、42-53
- ⑲ 中野聡他編、戸邊秀明、岩波書店、岩波講座 東アジア近現代史通史 第8巻 ベトナム戦争の時代（沖縄「占領」からみた日本の「高度成長」）、2011、242-259
- ⑳ 陳光興、丸川哲史訳、以文社、脱帝国—方法としてのアジア、2011、202
- ㉑ 鳥羽耕史、河出書房新社、1950年代—「記録」の時代、2010、222
- ㉒ 丸川哲史、以文社、魯迅と毛沢東、2010、315

6. 研究組織

(1) 研究代表者

成田龍一 (NNARITA, Ryuichi)
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号：60189214

(2) 研究分担者

岩崎稔 (IWASAKI, Minoru)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：10201948

坪井秀人 (TSUBOI, Hideto)
国際日本文化研究センター・研究部・教授
研究者番号：90197757

鳥羽耕史 (TOBA, Koji)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：90346586

戸邊秀明 (TOBE, Hideaki)
東京経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：90366998

丸川哲史 (MARUKAWA, Tetsushi)
明治大学・政治経済学部・専任教授
研究者番号：50337903

吉見俊哉 (YOSHIMI, Syunya)
東京大学・大学院情報学環・学際情報学
府・教授
研究者番号：40201040

渡辺 直紀 (WATANABE, Naoki)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：80409367

(3) 連携研究者

佐藤泉 (SATO, Izumi)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号：80279637